

戦前期満洲の三大温泉

——旅行案内に見る旅館施設等の変遷——

瀧 下 彩 子

日本人が満洲（本稿では歴史的名称として、「満洲」を使用する）に温泉があることを知ったのは、日清・日露戦争を契機としてである。1894年10月、鴨緑江を渡った日本軍は九連城を占拠し鳳凰城へと進軍するが、その途上で五龍背に温泉があることを知った。さらに鳳凰城から海城を経て牛荘に進む途中、湯崗子の温泉を利用したといわれる。その後の日露戦争の際には、熊岳河に湧き出る温泉を付近の住民が利用していることを知り、日本軍はここに初めて浴槽を設け、療養に用いた。この湯崗子、熊岳城、五龍背の温泉は、その後「満洲三大温泉」と称され、日本式の温泉旅館や温泉ホテルが経営され、多くの日本人が訪れることとなる。

上記の三つの温泉を含め、満洲には温泉が比較的多く存在する。それらは、近隣の住民に古くから知られ利用されていた。湯崗子と五龍背はともに、唐の太宗が高句麗討伐の際に傷病兵の療養のために用いたとの伝説があり、熊岳河では住民たちが河床を掘って身を沈める方法で温浴を行ってきた。しかし、満洲に進出した日本人が中国的な温泉の入り方を試みた様子はない。それはたとえば、日露戦争で第二軍に従軍した田山花袋の以下のような印象にも原因を求めることができるかもしれない。

さて、湯に入つて驚いた。実に不潔も不潔、その臭さと言つたら、丸で肥料溜にても入つたかのやう。湯はたたきの広い浴槽に沸かされてあるのではあるが、其たたきが幾日も洗はぬと見えて、ぬらぬらと余程注意を為んければ滑つて了ふという有様。そして其の湯の

浅さは膝位。ああ自分等は久し振りで湯に入れると勇んで遣つて来たのであるが、其周囲の不潔と支那人の臭気とにはしたたか辟易して、碌々身体も暖めずに出て了つた¹⁾。

この文章には多分に文学的な誇張が入っており、また、北京の澡堂などのように比較的清潔な銭湯が存在したことも知られている。しかし、当時の中流階級以上の日本人が、中国の地方都市の銭湯に対して抱いた抵抗感を示す事例と考えることはできるだろう。

日本人向けの満洲観光案内として確認できる最も早期のものは1900年に南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）が発行した『南満洲鉄道案内』だが、その記述によれば、すでに日露戦争直後から3つの温泉では日本人が温泉旅館を経営していた。日本人は東アジア諸地域に進出する過程で、版図となった地域に、町名や神社、料亭、遊郭など様々な日本的な物を持ち込んだ。その中でも、温泉行楽という娯楽システムを移植したことは非常に興味深い。満洲で温泉旅行ができるという認識は、多くの国民の満洲イメージを変えたと思われるからである。

日露戦争直後の日本人にとって満洲は、鉄血の代価を払ったにもかかわらず単に旅順・大連の租借地とわずかな鉄道権益を獲得したにすぎない苦々しい思いを抱かせる土地であり、同時に国家の未来を切り拓くための仕事の場であった。確かに出張視察など（そこには戦跡観光が付随することが多かった）のために各地に満鉄経営のヤマトホテルが建てられ、旅行のできる体制は整えられたが、それは「血なまぐさい観光」²⁾といった認識から切り離せないものであったろう。だが、そこで温泉旅行ができるを知ったとき、満洲イメージには、日常的な親しみと心を浮き立たせるような楽しさが加わったであろうと思われる。

ここでは、3つの温泉の来歴や特色について述べ、さらに東洋文庫の所蔵資料を中心に、温泉案内や旅行記に記された各温泉の旅館施設や周辺環境の推移について紹介したい³⁾。

1. 満洲の3大温泉地

(1) 湯崗子温泉

満鉄の最寄り駅は湯崗子または鞍山で、温泉は湯崗子駅から約400m余の満鉄附属地内に位置する。湧出量は一昼夜200～300石（約45000リットル前後）と記されており⁴⁾、24時間の湧出量とすれば、毎分32リットル程度と考えられる。総湧出量が毎分18474リットルの箱根温泉には、約400本の源泉があるとされているから、箱根の場合の1源泉あたりの湧出量は40～50リットル程度である。湯崗子の源泉は5つあるので⁵⁾、この湧出量はあまり規模の大きい温泉とは言えない。湯の温度は73.5度で、無色透明のアルカリ泉でありややラジウム性を帯びている。ちなみに、熊岳城と五龍背も同じアルカリ泉であり、いずれもリュウマチ、湿疹、ヒステリー、胃腸カタル、婦人病などに効能があるとされる。

温泉の由来は古く、唐の太宗李世民が高句麗遠征のうちに傷兵を療養させたとの伝説がある。高句麗に遠征した唐の陸上部隊は遼河を越えて遼東城（現在の遼陽）に至り、さらに南下して安市城（現在の海城付近）を攻撃したとされているので⁶⁾、遼陽と海城の間にある湯崗子を利用した可能性はあるが真偽は確認できない。李世民は驪山温泉に離宮や温泉銘の碑を建てていることから、このような伝説が残ったとも考えられる。くだって清代になると、乾隆帝が滞在したとの故事がある。これは湯崗子の近くで発見された龍王廟修築の石碑に、乾隆年間の銘があることから生じた逸話ではなかろうか。

先に述べたように、日清戦争において鳳凰城から牛荘に進軍する日本軍がこの温泉を利用し、その後、ロシアの将軍クロバトキンが転地療養所として選定した。ロシアが療養施設に用いた建物は、のちに日本人が旅館として再利用している。日本軍は、日露戦争で遼陽を占領した後、ここに陸軍の転地療養所を置いた⁷⁾。

旅館については、2の「旅行案内に見る温泉旅館施設等の変遷」の表に詳述するが、日露戦争の直後から、日本人がロシアの施設を再利用して＜清林館＞を経営していた。しかし、1919年8月に火災によって清林館の大部分が焼失したため、満鉄が資本金200万円を以て湯崗子温泉株式会社を設立し、＜対翠閣＞＜玉泉館＞という二つの旅館建物と日帰

り浴客用の施設である〈共楽館〉を増築した⁸⁾。1922年10月には、中国人用温泉施設として〈龍泉別墅〉が開業するが、これは、中国人浴場の〈金温泉〉の設備が不完全であったため、満鉄の6代目社長早川千吉郎が「日支友好上問題である」として湯崗子温泉株式会社に改善を促した結果である⁹⁾。その後、増加するロシア人湯治客に対応するため、〈玉泉館〉にはロシア館が増設された¹⁰⁾。1920年代半ばには、日本国内の温泉旅行ブームに乗り、旅行案内で紹介されるほか、満鉄の招待で満洲を旅行した各界文化人の旅行記などで、湯崗子温泉はさかんに紹介された¹¹⁾。

しかし、なんといっても湯崗子温泉の名を高めたのは、1932年の溥儀の滞在である。満洲国執政となることを承諾した溥儀は、天津を出て営口をを經由し旅順にむかう途中、この湯崗子に滞在した。溥儀夫妻とその側近の滞在のために、湯崗子温泉では〈対翠閣〉を修築した。1933年以降の旅行案内では、溥儀の滞在は湯崗子温泉の格式を高める形容パターンとなっている。

(2) 熊岳城温泉

熊岳城は遼代以来の古城として知られ、温泉は最寄り駅の熊岳城から4キロほど離れた熊岳河の川沿いに位置する。この温泉の特徴は、河床から温泉が湧出していることである。川筋が変わると湧出場所も変わるため、湧出量などは判然としない。温度は50度程度とされている。付近の住民は川底を掘って入浴していたが、日本人がそのような風呂の入りに方に満足できるはずもなく、1906年に日本軍の守備隊長がはじめて浴槽を設け、「同楽温泉」と名付けた。前述した田山花袋は金州の浴場に懲りた後、この熊岳城の臨時温泉に入浴している。湯崗子温泉と同様に、附属地内に位置しており、後に満鉄を特急が走るようになると、大連からは3時間ほどで行けるようになった。旅順・大連在住の日本人には最も利用しやすい温泉であったと思われる。

日露戦争後、〈温泉ホテル〉が経営され、河原を利用した「砂湯」が名物であった。後には、冬に砂湯を楽しむために、ガラス張りの〈イタリー式砂湯浴場〉が建設されている。

湯崗子温泉が大人の社交場的な役割を持ち、特に溥儀の滞後は高級

旅館として機能したのに対し、熊岳城温泉は庶民的な温泉であったと思われる。1919年に初めて小学生のための温泉学校が開設され、以降毎年行われた。1931年の少年日本地理文庫では、「温泉地熊岳城」が大項目として上げられている一方で、湯岡子と五龍背はそれぞれ小項目としてとりあげられているにすぎない¹²⁾。また、1935年に作製された『満洲イロハカルタ』¹³⁾には、「ランセンハスナユデ名高イイウガクジャウ」の札が見えるが、湯岡子温泉にふれた札は無い。1939年に刊行された尋常小学校低学年用の副読本には、熊岳城温泉の様子が子供向けに以下のように紹介されている。

大連駅で「はと」にのれば三時かたらず、奉天からも三時かんと少して熊岳城駅につきます。駅には、まくわうりや、べになしや、りんごなど、くだものをたくさんうつてゐます。(中略) まづ温泉ホテルで一やすみしました。そしてすぐ温泉にとびこみました。きれいな大きなおふろです。ここの温泉はホテルの内湯と砂湯の二つにわかれてゐます。私はおふろのやうな温泉から上つて名ぶつの砂湯へいつてみました。

ゆつくりながれる熊岳河は、きれいにすんでゐます。そのすぐよこの河原をほれば、「こんなところにお湯が。」と思はれるところに、こんこんとあついお湯がわきでてくるのです。青天じようにすなをほつてあほむきになつて、からだ中を砂にうづめて、頭だけ出してゐる人が十四、五人もゐます。黒の水ぎのおばさんはあまり太つてゐるので、からだ半分しかうづまつてゐませんでした。こんどはプール。五十メートルもあるお湯のプールですから面白いです。(中略) 土曜日から日曜日にかけては、おきやくさんで、一ぱいになります¹⁴⁾。

これらの資料からは、熊岳城が、当時の子供たちにとって非常に親しみ深い温泉であったことがうかがえる。

(3) 五龍背温泉

最寄り駅は安奉線の五龍背で、安東（現在の丹東）からの所要時間は

30分ほどである。湯崗子と同様に、唐の太宗の伝説が残っており、また地元では光緒年間から存在が知られた温泉であったという¹⁵⁾。日清戦争で、第5師団第11連隊の兵站部が発見し、日露戦争の際には療養所が置かれた。その後、日露戦争に従軍していた庵谷という日本人が〈温泉ホテル〉を経営し、やがて〈五龍閣〉という温泉旅館が建設された。1918年からは満鉄が経営をひきつぎ、1930年代には満鉄直営の温泉となった。湧出量ははじめ一昼夜に250石と記されるが（毎分約31リットル）、1933年の記事では500石と倍増している。57度の無色透明のアルカリ泉で、「五龍背の湯泉は針をおとしてもすぐにひろへる」¹⁶⁾と言われるほど水質が澄んでいた。

温泉は駅のすぐ近くにあるが、ここは附属地内ではないため、当初は駅員と旅館の従業員以外の日本人は居住していなかった。五龍背駅が位置する安奉線は、日露戦争時に奉天に物資を補給するための軽便鉄道として敷設された。戦後もしばらくは軽便鉄道のまま旅客が利用していたが、急勾配急カーブの連続で、「脱線転覆日ニ幾回、旅客皆ナ其ノ危険ヲ恐レ、本線ヲ利用スルモノ寥寥タル有様ナリ」¹⁷⁾という状況であったため、満鉄は1909年8月に改築工事に着手し、1911年10月に全線を広軌化した¹⁸⁾。それでも、奉天から5時間、京城や平壤からも一日がかりの行程となるため、朝鮮満洲在住の日本人にとっても気軽に利用できる温泉ではない。しかし、金剛山系の田園風景の中に位置し、遠くに五龍山をながめる風情は、日本の長野や山梨の風景にも似通い、「満洲とは思へぬ内地田園村落の趣」¹⁹⁾、「故郷の生活を偲ぶ魅力」²⁰⁾が売り物であった。

2. 旅行案内に見る温泉旅館施設等の変遷

以下の表は、東洋文庫と国立国会図書館等が所蔵する満洲の旅行案内を参照し、3つの温泉の施設状況についてまとめ、その変遷を示したのである。また、「(4) その他の温泉」には、三温泉以外の満洲の主な温泉についての情報をまとめた。表の左に「時期」の欄を設けたが、記載内容と出版年には誤差があるため、参考程度に参照されたい。

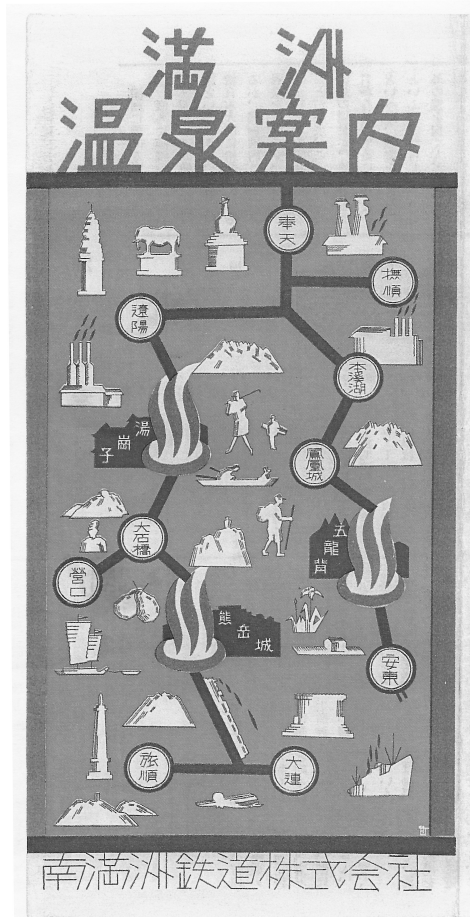
<凡例>

・ 出典欄について

資料名（著者，出版年，出版者）とし，著者と出版者が同じ場合は，出版者を省略した。

・ 欠字などにより情報を推測した際は [] を付した。

・ 宿泊費は基本的に1泊2食である。日帰り・自炊の場合は入浴込みの1日分料金を記載した。また、「茶代」とは待遇改善などを目的に宿泊費や女中への心付けとは別に渡す賄賂である。



『満洲温泉案内』（満鉄，1933年）表紙

(1) 湯崗子

時期	出典	温泉の特徴・見所	施設名
1900	南満洲鉄道案内 満鉄、1909	・45～70度、湯だまりは遊泳できる ・陸軍転地療養所あり	金湯（きんとう）ホテル
	満韓ところどころ 夏目漱石、1909	・満鉄本線の急行は週2回程度で、普通列車は1日2～3回。駅は縁日の夜店なみに小さい ・宿は一軒のみ ・宿から湯までは徒歩で1丁（約109m）ほど ・軍政時代に軍人が作ったもので、四方石造り ・「入浴時間は15分をこゆべからず」の張り紙が残る	清林館
1910	吾輩は何処に泊らう？ 日韓旅館要録編纂所、1910、 東京人事興信所	「満洲唯一の温泉場」と記載	金湯ホテル
			藤屋
	旅館要録 東京人事興信所、1911、 東京人事興信所	「満洲唯一の温泉場」と記載	金湯ホテル
			藤屋
	南満洲鉄道案内 満鉄、1912	浴客が次第に増加。千山を訪れる客の多くが利用するため、繁栄しつつある	
	満洲旅行案内 満鉄、1914	遼東最古の温泉	(施設名なし)
1915	満鮮観光旅程 満鉄大連管理局営業課、 1916		清林館
	南満洲鉄道旅行案内 1917、満鉄	・温泉往復割引乗車券あり ・鉱泉水の製造所あり ・シベリアからの客が年々増加。千山観光客も多い	清林館

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

施設特色	部屋等級	宿泊料金	食事朝	食事昼	食事夕
		1円50銭 ～4円		宿泊費 の半額	
・平屋造りの洋館 ・大広間にオルガン ・和洋折衷の部屋					
温泉旅館		1円75銭 2円 3円			
温泉旅館		1円75銭 2円 3円			
温泉旅館		1円75銭 2円 3円			
温泉旅館		1円75銭 2円 3円			
・宏壮な建物 ・宿泊向き、滞在向き、日帰り向き、「支那館」 などあり ・客室、内湯の設備を完備					
温泉旅館					
・林屋某が経営 ・最近増築し電灯を敷設 ・外湯と称する簡便な浴室 ・浴室を新築し、温室で草花を育てるなど、 内地の温泉よりも優れた設備 ・滞在客に割り引きあり		50銭～5円	1食30銭～1円50銭		

	南満洲鉄道旅行案内 大正8年版 1919、満鉄	<ul style="list-style-type: none"> ・近年、湧泉による400坪の池を利用して水田を経営する者あり ・飲料水の製造所あり ・浴客は増加し、特に外国人客が年々増加。千山観光の客も多い 	清林館	
	満洲温泉海水浴案内 [1919、満鉄]	<ul style="list-style-type: none"> ・満洲らしい眺望は三温泉中第一 ・近年客が増加、繁栄しつつある ・湧泉による400坪ほどの池では、舟遊び、遊泳ができる 	清林館本館・新館	
			2号館	
			3号館	
	満鮮観光旅程 満鉄大連管理局営業課、1919		清林館	
1920	満鮮観光旅程 満鉄大連管理局営業課、1920		清林館	
	鮮満支観光旅程 満鉄鮮満案内所、1922		温泉旅館	
	乾ける国へ：満鮮支那旅行 木下立安、1923、鉄道時報局		対翠閣	

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

<ul style="list-style-type: none"> ・満鉄が所有し、米林某に委託経営させる ・ロシア時代の建物を改築し客室を増築、浴室を新築、電燈整備、温室を設置 ・簡便な外湯あり ・滞在客は割引あり 		50銭～10円	一食 40 銭～ 1 円 50 銭		
<ul style="list-style-type: none"> ・客室浴場その他施設が完備し、日本の一流温泉旅館に匹敵 ・最近客室を増築、庭園をもうけた ・和室 34 ・和洋折衷客室 1 ・洋室 2 室（外国人向け） ・本館の内湯 4（梅、あやめ、萩、菊） ・温室、娯楽室（ビリヤード、ピアノ）あり ・冬季対策として、本館はペチカ、新館はスチームヒーター使用 ・簡単な洋食を用意 ・長期滞在者には割引あり 	新館 1 等	5 円 80 銭	特等 1 円 50 銭	特等 2 円	特等 2 円
	本館 1 等	5 円 80 銭	1 円 20 銭	1 円 50 銭	1 円 50 銭
	新館 2 等	4 円 50 銭	90 銭	1 円 20 銭	1 円 20 銭
	本館 3 等	3 円 50 銭	60 銭	90 銭	90 銭
	本館 4 等	2 円 50 銭	40 銭	60 銭	60 銭
	本館 5 等	1 円 80 銭			
<ul style="list-style-type: none"> ・療養、長期滞在用者 ・自炊可能 ・内湯 5（松、竹、梅、鶴、亀） ・暖房はペチカ 	5 等のみ	40 銭			
<ul style="list-style-type: none"> ・40 畳の大広間 ・共同浴槽、大湯、金湯、御前湯あり ・暖房はペチカ 	休憩				
温泉旅館					
温泉旅館					
○（本書では、◎は特等または [洋] 式、○は 1 等または 2 等）					
<ul style="list-style-type: none"> ・一尺平方 10 円以上する満洲特産斑点大理石の浴槽 ・建物は和洋中の 3 種 ・「満鉄の普請だけに座敷も清浄、夜具もサッパリ。料理も女中の世話も重々異存はなく候。先ず満洲旅行中で内地人の最も喜ぶ場所の一つでしょうよ」 					

	満鮮の行楽 田山花袋、1924、大阪屋 号書店	<ul style="list-style-type: none"> ・ 駅から温泉までアカシアの並木 ・ 周囲は赤茶けた丘陵のみで平凡な眺望のため、満鉄によって池が造られ、樹木が植えられている ・ 「アカシアの樹の間を向こうに出ると、芦の芽の生えた小さな池があって、その向こうにヴェランダを持った大きな建物が現はれ出して来た。それが対翠閣であった。」 	対翠閣	
			玉泉館	
			清林館	
			共楽館	
	鮮満支那旅程と費用概算 1924、[満鉄東京鮮満案 内所]		対翠閣	
			玉泉館	
	南満洲鉄道旅行案内及附録 満鉄、1924	駅から徒歩 10 分	清林館	
1925	朝鮮満洲旅行案内：附支 那旅行案内 満鉄鮮満案内所、1925	・ 湯崗子温泉会社の経営による	対翠閣	
			玉泉館	
			清林館	
	満洲旅行案内 満鉄、1925		龍泉別墅	
	遼陽と鞍山：附・千山、湯 崗子 遼鞍毎日新聞社、1925		対翠閣	

戦前満洲の三大温泉（瀧下）

<ul style="list-style-type: none"> ・温泉場としては、内地ではこれだけのものは何処にも求められない ・和室には副室あり。ベランダのように椅子や机がならべられている ・浴槽では中国人のボーイがタオルを持って迎える ・箱根、塩原、伊香保どこにいても見たことのない設備の整った立派な浴槽 ・浴槽に沿って細長い瀟洒な庭がありガラス越しに草花が見える ・ビリヤード室、応接間あり ・茶代廃止 ・中国人用の大きな建物あり 	10畳	7円	定食2円		
	8畳	4円			
室代と食事が別	6畳程度	2円	定食1円50銭		
自炊。実費制度					
日帰り用		50銭			
<ul style="list-style-type: none"> ・浴室・客室とも「瀟洒」で電灯その他を完備。 内地の温泉場に遜色ない 	席料	50銭~5円	30銭~1円50銭		
		4円~ 茶代廃止			
<ul style="list-style-type: none"> ・広大な建物、客室と内湯の設備完備 ・宿泊向き、滞在向き、日帰り向き、「支那旅館」の区別あり 					
<ul style="list-style-type: none"> ・2階建て ・和洋客室32 ・大広間2 ・大理石の家族風呂3（鶴・をしどり・鷺） ・女湯2（かもめ・千鳥） ・旭日型の共同浴場1 ・娯楽室、食堂、応接室、理髪室など有り ・浴室の屋上は庭園 	1階8畳	3円50銭	1円50銭	2円	2円
	1階8畳 ベランダ 付き	4円			
	2階8畳	4円			
	2階8畳 ベランダ 付き	5円			
	洋室	5円			

		玉泉館	
		清林館	
		龍泉別墅	
		露西亞館	
朝鮮満洲旅行案内：附支那旅行案内 満鉄鮮満案内所、1926		対翠閣	
		玉泉館	
		清林館	
		龍泉別墅	
満鉄沿線案内 満鉄、[1927]	満洲の代表的温泉浴場		
南満洲鉄道旅行案内 1929、満鉄	<ul style="list-style-type: none"> ・ 付近は満鉄経営の公園。小運動会など開ける。園内に「閑院宮家お手植えの松」あり ・ 湯元は5カ所 ・ 庭園に2つの池。貸しボートなどあり（1時間30銭、30分20銭） ・ 5月と8月の客が多く、11月と2月は少ない。1927年度は宿泊20470人、日帰り11757人。外人はロシア人が多く、のべ7107人 	対翠閣	

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

<ul style="list-style-type: none"> ・2階建て洋館 ・和式客室 34 ・浴室男女各1（すみれ・なでしこ） ・娯楽室、読書室有り 	6畳	1円50銭	1円	1円50銭	1円50銭
	8畳	2円50銭			
	自炊	1円 1人増で50銭増し 1週間以上滞在する場合は[別料金]			
<ul style="list-style-type: none"> ・純日本式平屋 ・元湯旅館 ・湧出量 40000石 ・客室大小 4 ・花崗岩の大浴場（男女別） 	日帰り	50銭	弁 50銭、仕度 80銭		
<ul style="list-style-type: none"> ・1922年に金温泉の設備不完全のため改築し、10月1日開業 ・中国式建築3階建 ・上等客室 10 ・普通客室 10 ・家族風呂 3 ・大浴場 1 					
<ul style="list-style-type: none"> ・ロシア人利用客のため1922年に玉泉館に増築 ・専用浴室 3 ・さらに浴室 10を増築 					
<ul style="list-style-type: none"> ・湯岡子温泉会社の経営による ・茶代廃止 		4円～			
	2等のみ	3円50銭～	1円50銭	2円	2円
	2等のみ	1円50銭～	1円	1円50銭	1円50銭
<ul style="list-style-type: none"> ・旅館はすべて湯岡子温泉会社の経営 ・設備完備の「高踏的旅館」 ・客室 29 ・男子共同浴室 1 ・婦人浴室 2 ・特別浴室 3（入浴料 20銭） ・ロシア人向けの土風呂用浴槽 7 ・応接室、新聞室、ビリヤード、食堂（一品料理あり）、新聞雑誌室、理髪室、売店あり ・心付けは2割 		7円 5円 4円 3円50銭	1円50銭	2円	2円

			玉泉館
			清林館
			共楽館
			龍泉別墅
	朝鮮満洲旅行案内 満鉄鮮満案内所、1929	・湯岡子温泉会社の経営による	対翠閣 玉泉館 清林館 龍泉別墅
1930	朝鮮満洲旅行案内 鮮満案内所、1930	・湯岡子温泉会社の経営による	対翠閣 玉泉館 清林館 龍泉別墅
	満蒙遊記 与謝野寛・与謝野晶子、 1930、大阪屋号所店	・周囲に湯河、甘泉堡の地名あり ・在満日本人のほか、夏はロシア人、中国人の 客もあり	龍泉別墅
	鮮満旅行記 吉野豊次郎、1930		対翠閣
			玉泉館

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

<ul style="list-style-type: none"> ・ 経済的 ・ 自炊設備あり ・ 客室 37 ・ 浴室 3 ・ 食堂（一品料理あり） ・ 夏季用のバラック（洋式）10。主にロシア人向け 		1円50銭 2円50銭	1円	1円50銭	1円50銭
	自炊	1円			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 日帰り団体客用 ・ 浴室 2 	休憩	50銭	并 40銭 仕度 80銭		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 清林館に附属 ・ 90畳広間 1 					
<ul style="list-style-type: none"> ・ 満洲国人、ロシア人向け ・ 洋式客室 22 ・ 浴室 4 ・ 応接室 		3円 2円70銭	定食 1円 60銭		
		4円～ 茶代廃止			
		4円～ 茶代廃止			
満鉄直営で大規模。設備が行き届いている。女中の質もよい					
<ul style="list-style-type: none"> ・ 満鉄経営 ・ 電信の受け取りが可能 					
<ul style="list-style-type: none"> ・ 中国建築 ・ 南側に湯元あり ・ 泥湯施設が付属しているが、その建物は貧弱不潔で、「某宮様」の痛惜により満鉄は5万円予算で泥湯入浴場を新築中 					

<p>満鮮趣味の旅 遅塚麗水、1930、大阪屋 号書店</p>	<p>・満洲三温泉のうち、ほかの二温泉よりも設備 が良いことで知られる</p>	<p>対翠閣 玉泉館 清林館</p>
<p>日本温泉案内：西部編 大日本雄弁会講談社、1930</p>	<p>(リストアップのみ)</p>	
<p>朝鮮満洲旅行案内 鮮満案内所、1931</p>	<p>・湯崗子温泉会社の経営による</p>	<p>対翠閣 玉泉館 清林館 龍泉別墅</p>
<p>満洲視察要覧：附遊覧案 内、昭和6年版 藤原満洲問題研究所、1931</p>	<p>・一昼夜200石湧出 ・鉱泉水を製造 ・日露戦争の際に、大山巖が本営を置き療養所 として利用した ・「壮麗な建物と設備万端整ひ満洲一の称がある」</p>	<p>対翠閣 玉泉館 清林館 龍泉別墅</p>
<p>支那及満洲旅行案内 後藤朝太郎、1932、春陽 堂</p>	<p>・6つの湯壺を中心に温泉施設がある ・満鉄の経営による ・客層は「大連、奉天、ハルビン、各地の大官 富豪連」 ・日本の箱根雲仙あたりよりも遙かに上位の温泉</p>	
<p>最新満洲国案内 東亜文化協会、1932、鉄 道研究社</p>	<p>内地からの旅行者は必ず訪問する温泉</p>	
<p>索引式全日本旅行辞典 ：附・満洲 旅行研究会、1932</p>	<p>・満洲三温泉の一つとして日本、中国、ロシア 人に知られる ・駅から温泉まで並木道が続く ・ブルジョア的、高踏的な匂いが濃い</p>	

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

<ul style="list-style-type: none"> ・筆者が宿泊した2階の一室は日本座敷に副室とベランダが付属し、ガラス窓に面したベランダには籐椅子とテーブルが備わっている ・大浴場と家族風呂があり、風呂からはガラス越しに温室のチューリップやペコニアが見える ・樹木の間には泉水やあずまやが設置されている 				
部屋代と食事代が別料金。いずれも非常に安価				
		4円～		
		茶代廃止		
設備完備の高踏的旅館		7円	1円50銭	2円
		5円		
		4円		
		3円50銭		
経済的な施設、自炊も可能		2円50銭	1円	1円50銭
		1円50銭		
日帰りまたは団体向き施設		50銭 (入浴込み)		定食80銭以上
洋式施設。中国人・ロシア人向け		3円	1円、60銭	
		2円		
		70銭		

満洲国旅行案内 大津敏也、1932、新光社	<ul style="list-style-type: none"> ・ 駅から温泉まで並木道が続き、田園情緒がある ・ 湯元は5カ所 ・ 8月は客多く、11月と2月は少ない ・ 年間宿泊客20,470人。外人はロシア人が多く、泥浴を好む ・ 庭園に2つの池、貸しボートあり ・ 民衆的な熊岳城にくらべ設備が良くブルジョア的 ・ 4館とも湯岡子温泉会社の経営で、同一敷地内 ・ 閑院宮殿下お手植えの松あり ・ 土風呂には7つの設備あり 	対翠閣
		玉泉館
		清林館
		龍泉別館
大満洲国読本 渋谷近蔵、1932、育英書院	<ul style="list-style-type: none"> ・ 満鉄の経営で設備は「至れり尽くせり」 ・ 湧出量は1日200石 ・ 400坪の湯の池にはボートあり 	
満洲温泉案内 満鉄鉄道部営業課、1933、満鉄	<ul style="list-style-type: none"> ・ 急行「はと」で大連から4時間40分。奉天から1時間30分 ・ 駅から温泉まで楊柳の並木がトンネルとなっている ・ 温泉割引往復乗車券あり ・ 1932年3月の満洲国誕生にあたり、溥儀夫妻、大臣一行が新京入りの際に休息した ・ 4館すべて湯岡子温泉会社の経営 ・ 温泉敷地内は満鉄経営の公園。釣魚、ボート、ゴルフ、ダンスホールあり ・ 湯元は5カ所 ・ 鉱泉水を製造 	対翠閣
		玉泉館
		清林館
		龍泉別墅
鮮満中国旅行手引 [満鉄] 東京支社庶務課、1933、[満鉄] 東京支社		対翠閣
		玉泉館
		清林館
		龍泉別墅

戦前満洲の三大温泉（瀧下）

		3円50銭～	1円50銭	2円	2円
自炊客のための設備あり		50 銭	1 円	1円50銭	1円50銭
日帰り団体客用		50 銭			
洋式		70 銭～	定食 1円、お好み 60 銭～		
<ul style="list-style-type: none"> ・設備と待遇の質で全満に知られる ・全館に内湯あり ・和室 26 ・洋室 3 ・名物マッドバスは東洋唯一で、ロシア人に広く利用されている ・最近、建物とともに諸般の施設が「泥浴療養所」として竣工。4月～10月は医師の診療あり 		3円50銭～20円	1円50銭	2円	2円
<ul style="list-style-type: none"> ・療養滞在客用。経済的 ・和室 22 		1円50銭～2円50銭	1円	1円50銭	1円50銭
	自炊	1円（1人増で50銭増し）			
<ul style="list-style-type: none"> ・日帰り団体客用 ・4～10月開館 ・和室 4 ・90畳間 1 		8円～30円			
	休憩	50 銭			
<ul style="list-style-type: none"> ・洋式 ・満洲国人、ロシア人向け ・4～10月開館 ・簡易食堂あり 	洋室 29	1円30銭～3円			

	朝鮮満洲旅行案内 満鉄、1933、鮮満案内所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 駅から温泉に美しい並木道がある ・ 土風呂が有名 ・ 湯崗子温泉会社の経営による 	対翠閣 玉泉館 清林館 龍泉別荘
	朝鮮満洲旅行案内 満鉄、1934、鮮満案内所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 駅から温泉に美しい並木道がある ・ 土風呂が有名 ・ 湯崗子温泉会社の経営による 	対翠閣 玉泉館 清林館 龍泉別荘
	鮮満中国旅行手引 [満鉄] 東京支社庶務課、 [1934.3]、[満鉄] 東京支社		対翠閣 玉泉館 清林館 龍泉別荘
1935	満洲旅行の栞 昭和10 年度版 [1935]		対翠閣 玉泉館
	満洲温泉案内 加藤郁哉、1935、満鉄鉄 道部旅客課	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「はと」で大連から4時間40分、奉天から1時間30分 ・ 泥浴場の「神の如き医薬的効能」が北満のロシア人の間に知られ、天津・青島・上海の外人客が殺到する ・ 電気浴、水圧浴治療などの化学的療養具を完備し、4～8月には医師が滞在して治療の監督指導にあたる 	対翠閣 玉泉館 清林館 龍泉別荘
	満洲温泉案内 加藤郁哉、1936、満鉄鉄 道部旅客課	釣り、ボート、テニスコート、運動場、ダンス ホール、ビリヤードなどの設備	(施設の詳細は

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

		4円～ 茶代廃止			
		4円～ 茶代廃止			
		4円～ 茶代廃止 心付1～2 割			
		4円～ 茶代廃止 心付1～ 2割			
<ul style="list-style-type: none"> ・全館、湯岡子温泉会社の経営 ・大理石の有料浴室5 ・蝶貝ちらしの大浴場2 ・和洋折衷で大小31室 		3円50銭 ～20円	1円～ 1円50銭	1円50銭 ～2円	1円50銭 ～2円
<ul style="list-style-type: none"> ・洋館 ・療養滞在客用。経済的 ・夏用の洋式分館あり 	和洋室30 大広間2	1円50銭～ 2円50銭	1円～ 1円50銭	1円50銭 ～2円	1円50銭 ～2円
	自炊	1円（1人増で50銭増）			
<ul style="list-style-type: none"> ・日帰り団体客用公衆浴場 ・小部屋4 ・和室 ・大浴槽4 ・300人収容可能な舞台作りの大広間1 	小部屋	1～1円50銭	食事は適宜注文		
	中 (和室か?)	8～15円			
	大広間	60円			
	休憩	50銭			
<ul style="list-style-type: none"> ・外観は中国式建築。内装は洋式 ・満洲国人、ロシア人向け ・洋室29 ・家族浴室3 ・共同浴槽 	洋室	1円30銭 ～3円	満洲料理の簡易食堂あり		
1935年版に同じ)					

	満鉄沿線案内 昭和11年度版 満鉄、1936、満鉄鉄道部 旅客課	溥儀が新京入りの際に滞在したことで知られる	[対翠閣]
	朝鮮満洲旅行案内 三省堂旅行案内内部、1936	溥儀が新京入りの際に滞在したことで知られる	対翠閣 龍泉館（誤記か） 清林館 玉泉別荘（誤記か） 対翠別館
	満洲旅行の栞 昭和12年度版 [1937]		対翠閣 玉泉館 樂山荘
	満洲旅行の栞 昭和13年度版 満鉄鉄道総局営業局旅客課、[1938]		対翠閣 玉泉館 樂山荘
	朝鮮満洲旅の栞 満鉄東京支社、1938	・湯崗子温泉株式会社の経営 ・東洋一の泥湯など、理想的温泉地	対翠閣 玉泉館 龍泉別荘
	満洲旅行の栞 加藤郁哉、1939、満鉄鉄道総局営業局旅客課		対翠閣 玉泉館 樂山荘
	東亜新満洲文庫尋常1・2・3学年用3（地理篇）：明るい港黄色い風 石森延男、1939、修文館		
	満支旅行年鑑 昭和14年版 ジャパン・ツーリスト・ビューロー満洲支部、1939、博文館	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)
	鮮満支旅の栞 満鉄東京支社、1939	・湯崗子温泉株式会社の経営 ・東洋一の泥湯など、理想的温泉地	対翠閣 玉泉館 龍泉別荘
1940	満支旅行年鑑 昭和15年版 ジャパン・ツーリスト・ビューロー満洲支部、1940、博文館	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

設備は満洲随一			
設備は満洲随一			
		4円～ 茶代廃止 心付1～2割	

満支旅行年鑑 昭和 16 年 ジャパン・ツーリスト・ ビューロー 満洲支部、 1941、博文館	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)	
満支旅行年鑑 昭和 17 年 東亜旅行社満洲支部、 1942	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	対翠閣	
		玉泉館	
		清林館	
		龍泉別荘	
満洲旅行の栞 昭和 17 年 度版 [1942]		対翠閣	
		玉泉館	
		樂山荘	
満支旅行案内 昭和 17 年 東亜旅行社満洲支部、 1942、博文館		対翠閣	
		玉泉館	
		清林館	
		龍泉別荘	
満支旅行年鑑 昭和 18 年 東亜旅行社満洲支部、 1943、東亜旅行社奉天支 社	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	対翠閣	
		玉泉館	
		清林館	
		龍泉別荘	

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

・客室 32 ・収容人員 165		4円～60円	
・客室 32 ・収容人員 106		2円～3円	
・客室 9 ・収容人員 113		3円～60円	
・客室 28 ・収容人員 65		1円 50 銭 ～ 3 円	
・客室 32 ・収容人員 165		4円～60円	
・客室 32 ・収容人員 106		2円～3円	
・客室 9 ・収容人員 113		3円～60円	
・客室 28 ・収容人員 65 [以下、不鮮明]		1円 30 銭 ～ 4 円	
・客室 32 ・収容人員 165		4円～60円	
・客室 32 ・収容人員 106		2円～3円	
・客室 9 ・収容人員 113		3円～60円	
・客室 28 ・収容人員 65		1円 30 銭 ～ 3 円	

(2) 熊岳城

時期	出典	温泉の特徴・見所	施設名
1900	第二軍従征日記 田山花袋、1905、博文館	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者は北大崗寨からの進軍中に、熊岳河にさしかかり、河原に2、3小屋のあるのを見つけ、3時間ほど入浴 ・正白旗の村に滞在 ・翌日は出発のため、夜に再度たずねると、大変な雑踏だった 	
	南満洲鉄道案内 満鉄、1909	<ul style="list-style-type: none"> ・軽便鉄道あり ・1906年駐屯守備隊長が浴槽3個を設置し「同楽温泉」と名付ける ・熊岳河の左岸は温泉流脈がある 	温泉ホテル
	滿韓ところどころ 夏目漱石、1909、春陽堂	<ul style="list-style-type: none"> ・駅の周囲は5、6軒の家があるのみ ・トロ（トロッコ）は軍人が造ったものをそのまま利用しているのではないか。中国人が押す ・高粱畑のなかを15～20分 ・周辺の河は砂ばかりで水が見えない ・川原を1丁ほど歩くと板囲いの小屋の中に温泉がある。四角い大きな桶を縁まで池のなかにいけこんだ状態 ・中国人のなかには、裸になって砂をかき分けて窪んだところに横になり、また砂をかけて入る者がいる ・共同風呂もあり 	
1910	吾輩は何処に泊らう？ 日韓旅館要録編纂所、1910、 東京人事興信所		温泉ホテル
	旅館要録 東京人事興信所、 1911、東京人事興信所		湯本屋
	南満洲鉄道案内 満鉄、1912	<ul style="list-style-type: none"> ・満鉄が手押し軽便鉄道を敷設 ・河床の10数カ所から湧出 	(施設名なし)

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

施設特色	部屋等級	宿泊料金	食事朝	食事昼	食事夕
・私営 ・館の側に浴槽を設置		1円50銭 ～3円		宿泊費 の半額	
Aクラス					
Bクラス ・客間6 ・「誠実」な旅館 ・館主：豊岡宗弘		1円 1円50銭 2円 3円			
Aクラス					
Bクラス ・開業1907年 ・和風平屋建 ・客間6 ・「誠実」な旅館 ・館主：豊岡宗弘		1円 1円50銭 2円 3円			
・日本人経営 ・「瀟洒」な旅館					

	満洲旅行案内 満鉄、1914	<ul style="list-style-type: none"> ・軽便 [馬] 鉄あり ・熊岳河に湧出、アルカリ泉、砂湯あり 	(施設名なし)
1915	南満洲鉄道旅行案内 1917、満鉄	<ul style="list-style-type: none"> ・満鉄により温泉までの手押し軽便鉄道あり ・満鉄が川岸に浴場を建設 	温泉ホテル
	南満洲鉄道旅行案内 大正 8年版 1919、満鉄	<ul style="list-style-type: none"> ・満鉄の手押し軽便鉄道あり (片道 10 銭) ・満鉄が川岸に浴場を建設 ・沿線の小学校の生徒のうち海水浴のできない者のために夏に「温泉学校」を開設 	温泉ホテル
	満洲温泉海水浴案内 [1919、満鉄]	<ul style="list-style-type: none"> ・正白旗村 ・駅から温泉までポプラ、胡藤の並木 ・満鉄による手押し軽便鉄道あり (片道 10 銭) 	温泉ホテル
1920	鮮満支観光旅程 満鉄鮮満案内所、1922		温泉ホテル

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

<ul style="list-style-type: none"> ・形田某が経営 ・洋風建築。設備完全 ・和洋客室 30 ・娯楽室 ・入浴は1日5銭 	宿泊2食つき	1～4円	宿泊費の半額
	貸間	20～40銭	
	下宿3食つき	1円	
<ul style="list-style-type: none"> ・満鉄の援助で杉田某が経営 ・洋館。内部は和洋折衷 ・客室 30 ・娯楽室あり ・入浴は1日5銭 	宿泊2食つき	2～4円	宿泊費の半額
	自炊貸間	20～40銭	
	下宿	1円	
<ul style="list-style-type: none"> ・冬季保温の関係上、洋館 ・内部はすべて和風 ・本館和室 36 ・本館は内湯と娯楽室あり ・団体と長期滞在客には割引あり ・本館以外は、下宿1日3食付きも可能 	本館特等(2人以上で利用の場合は2～5割増し)	6円 室料3円	
	本館1等	5円 室料2円	
	本館2等	4円 室料1円 50銭	
	本館3等	3円50銭 室料1円	
	2号館1等	2円50銭 室料60銭	
	2号館2等	1円50銭 室料50銭	
	2号館3等	1円 室料40銭	
	3号館2等	1円50銭 室料30銭	
	3号館3等	1円 室料20銭	
	○（本書では、◎は特等または〔洋〕式、○は1等または2等）		

	<p>満鮮の行楽 田山花袋、1924、大阪屋 号書店</p>	<p>(筆者は日露戦争時に入浴している) ・ 駅から温泉までアカシアと榆と柳の並木 ・ 列車の到着にあわせて驢馬2頭がひく無蓋軌 道車が待っている。所要時間15分程度 ・ 川原には今もなお蒸し湯あり</p>		
	<p>鮮満支那旅程と費用概算 1924、[満鉄東京鮮満案 内所]</p>		温泉ホテル	
	<p>南満洲鉄道旅行案内及附録 満鉄、1924</p>	<p>駅から温泉まで手押軽便鉄道(片道10銭)</p>	温泉ホテル	
1925	<p>満洲旅行案内 満鉄、1925</p>	<p>駅から温泉まで軽便馬鉄あり</p>		
	<p>満鉄沿線案内 満鉄、[1927]</p>	<p>軽便馬鉄あり</p>	温泉ホテル	
	<p>南満洲鉄道旅行案内 1929、満鉄</p>	<p>・ 駅から温泉まで楊柳、ポプラ、アカシア並木 の街道 ・ 駅から自動車で60銭、馬車20銭(2人1台 ならば30銭) ・ 砂湯とホテルの内湯があるが、名物は砂湯。河 床を掘って砂湯をするかプールを作って入浴 ・ 無料のため、7～8月は日帰り客が多い ・ 夏季は沿線小学児童の温泉聚落が催される。 そのためのバラックあり ・ 他の温泉に比べて民衆的</p>	温泉ホテル	
			養生館	

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

<ul style="list-style-type: none"> ・湯崗子とは比較にならないが、内地の温泉にくらべて遜色ない ・浴槽がいくつもあり、各自に一つずつ副室がある ・アカシアのなかに瀟洒な休み茶屋。温泉経営者の石碑（大町による）あり ・蒸し湯の設備も完備 				
<ul style="list-style-type: none"> ・洋館 ・和洋折衷の客室 30 余 ・入浴 1 日 5 銭 ・貸間 1 日 20 ～ 40 銭 	3 食付き	1 円		
<ul style="list-style-type: none"> ・砂湯が有名 ・眺望良く、設備完備 				
砂湯が可能	2 等のみ	4 ～ 8 円		1 円～(2 等のみ)
全 75 室	本館階上・西側 本館階上・南側 本館階上・北側 本館階下・南側 本館階下・北側 別館・南側 別館・北側	7 円 6 円 50 銭 5 円 50 銭 4 円 50 銭 6 円 5 円 5 円 50 銭 4 円 50 銭 6 円 50 銭 4 円 50 銭 6 円 4 円		1 円 50 銭
<ul style="list-style-type: none"> ・長期滞在者用 ・宿泊費は入浴料と電灯料こみ 		80 銭～ 1 円 50 銭 (1 人増で 5 割増)		
	簡易食堂		1 品 30 銭以上、弁当あり	

1930	日本温泉案内：西部編 大日本雄弁会講談社、1930	(リストアップのみ)	
	満蒙遊記 与謝野寛・与謝野晶子、 1930、大阪屋号所店	<ul style="list-style-type: none"> ・温泉宿は熊岳河の上流西岸 ・河原で自由に砂湯を楽しむことができる ・夏季には大連からの入浴客が多い ・「山川と楊柳の景に富み、泉質も箱根のやうに美しい」 	
	満洲視察要覧：附遊覧案内、昭和6年版 藤原満洲問題研究所、1931	<ul style="list-style-type: none"> ・大連から5時間あまり、奉天から5時間 ・駅から温泉まで自動車で60銭、馬車鉄道で20銭（2人1台ならば30銭） 	温泉ホテル
	少年日本地理文庫：関東州南満洲 橋本賢康、1931、厚生閣書店	<ul style="list-style-type: none"> ・大連から4時間 ・砂湯が名物 ・夏に温泉学校が開催される 	
	最新満洲国案内 東亜文化協会、1932、鉄道研究社	<ul style="list-style-type: none"> ・自由に砂湯を楽しむことができる ・温泉プールあり 	
	索引式全日本旅行辞典：附・満洲 旅行研究会、1932	<ul style="list-style-type: none"> ・駅から温泉まで鉄道馬車、自動車がある ・砂湯が有名 ・夏季に沿線小学生の林間学校が設けられる 	
	満洲国旅行案内 大津敏也、1932、新光社	<ul style="list-style-type: none"> ・駅から温泉まで楊柳、ポプラ、アカシアの並木道 ・砂湯が有名。河を掘り、プルを作って入浴する ・夏は沿線児童の温泉集落、バラックなどあり 	温泉ホテル
	熊岳城の砂湯と伝説 林重生（『温泉』3巻5号、1932.5、日本温泉協会）	<ul style="list-style-type: none"> ・大連から3時間 ・中国人は昔から焙烙温泉と呼んでいた ・熊岳河の氾濫で施設が何度も流されている 	温泉ホテル
			養生館

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

	本館	4円50銭 ～7円			
	別館	4～6円			
	養生館(日 帰り1室)	80銭～ 1円50銭			
	簡易食堂		1品30銭～		
・長期の自炊客が多い。風呂は内湯 ・宿泊費は入浴料、電灯料こみ	本館階上・ 南側	6円～		1円50銭 ～	
	本館階上・ 北側	5円～			
	本館階下・ 南側	5円50銭～			
	本館階下・ 北側	4円～			
		80銭～ 1円50銭 (1人増で 5割増)			
・名物女将「おつねばあさん」 ・砂場には中国人の「三助」がいる ・前年にガラス張りの砂風呂が造られた					

	大満洲国読本 渋谷近蔵、1932、育英書院	<ul style="list-style-type: none"> ・大連から4時間。旅順大連に近く利用客が多い ・駅から温泉まで軽便あり ・砂湯が有名 	
	満洲温泉案内 満鉄鉄道部営業課、1933、 満鉄	<ul style="list-style-type: none"> ・急行「はと」で大連から3時間弱、奉天から3時間20分 ・温泉割引往復乗車券あり ・駅から温泉まで楊柳、ポプラ、アカシア並木が続く ・馬車片道15銭 ・駅から熊岳城まで15銭、満鉄農事試験場と望小山まで50銭、望小山まわり温泉まで1円・砂湯とホテルの内湯あり。名物は砂湯。近年冬に砂湯を楽しむためのガラス張りイタリ一式砂湯浴場が出来た ・夏季は満鉄沿線小学児童の聚落が催される 	温泉ホテル
	朝鮮満洲旅行案内 満鉄、1933、鮮満案内所	砂湯が有名	温泉ホテル
	朝鮮満洲旅行案内 満鉄、1934、鮮満案内所	<ul style="list-style-type: none"> ・砂湯が有名 ・民衆の設備あり。遊覧地に適している 	温泉ホテル
	鮮満中国旅行手引 [満鉄] 東京支社庶務課、 [1934.3]、[満鉄] 東京支社		温泉ホテル
1935	満洲旅行の葉 昭和10 年度版 [1935]		温泉ホテル
	満洲温泉案内 加藤郁哉、1935、満鉄鉄 道部旅客課	駅から温泉へバスと馬車あり	熊岳城温泉 ホテル
	満洲温泉案内 加藤郁哉、1936、満鉄鉄 道部旅客課	(1935年版に同じ)	

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

本館 ・民衆的であることが特徴 ・和室 32	宿泊	3 円 50 銭 ～ 7 円		1 円～ 1円50銭	
	休憩	50 銭			
養生館 ・自炊 ・40 室 ・宿泊は入湯、電灯料こみ		80 銭～ 1 円 50 銭 (1 人増で 5 割増)			
	養生館休憩	20 銭			
		2～6 円 茶代廃止			
		2～6 円 茶代廃止			
		4 円～ 茶代廃止 心付1～2割			
本館 ・庶民的 ・和室 32 ・砂湯とホテルの内湯がある ・砂湯には、ガラス張りのイタリー式砂湯浴 場（別名：軍艦風呂）あり ・温泉プール 2 ・沿線小学生のための学校あり	宿泊	3 円 50 銭 ～ 7 円		1 円～ 1円50銭	
	休憩	50 銭			
養生館 ・自炊、長期滞在用 ・40 室 ・日帰り向きの別館あり ・入浴、電灯料こみ		80 銭～ 1 円 50 銭 (1 人増で 5 割増)			
	休憩	20 銭			

	満鉄沿線案内 昭和 11 年 度版 満鉄、1936、満鉄鉄道部 旅客課	古来渤海の要衝として知られる	
	朝鮮満洲旅行案内 三省堂旅行案内内部、1936、 同編著者	ポプラ、柳、アカシアの並木あり	温泉ホテル
	満洲旅行の栞 昭和 12 年 度版 [1937]		温泉ホテル
	満洲旅行の栞 昭和 13 年 度版 満鉄鉄道総局営業局旅客 課、[1938]		温泉ホテル
	朝鮮満洲旅の栞 満鉄東京支社、1938	・美しい並木の散歩道あり ・民衆の安価な施設 ・夏季利用客が増加	温泉ホテル
	満洲旅行の栞 加藤郁哉、1939、満鉄鉄 道総局営業局旅客課		温泉ホテル
	東亜新満洲文庫尋常 1・2・ 3 学年用 3 (地理篇) : 明るい港黄色い風 石森延男、1939、修文館		
	満支旅行年鑑 昭和 14 年 版 ジャパン・ツーリスト・ ビューロー 満洲支部、 1939、博文館	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)
	鮮満支旅の栞 満鉄東京支社、1939	・美しい並木の散歩道あり ・民衆の安価な施設 ・夏季利用客が増加	温泉ホテル
1940	満支旅行年鑑 昭和 15 年 ジャパン・ツーリスト・ ビューロー 満洲支部、 1940、博文館	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)
	満支旅行年鑑 昭和 16 年 ジャパン・ツーリスト・ ビューロー 満洲支部、 1941、博文館	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)
	満支旅行年鑑 昭和 17 年 東亜旅行社満洲支部、1942	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

砂湯にモダンな浴場あり			
・旅館に内湯、河原に砂湯施設あり ・モダンな砂湯施設は四季を通じて利用できる			
		4円～ 茶代廃止 心付1～2割	

満洲旅行の葉 昭和 17 年 度版 [1942]		温泉ホテル
満支旅行案内 昭和 17 年 東亜旅行社満洲支部、1942、 博文館	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)
満支旅行年鑑 昭和 18 年 東亜旅行社満洲支部、1943、 東亜旅行社奉天支社	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)



『湯岡子温泉絵葉書第二輯』（湯岡子温泉株式会社）袋

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）



対翠閣（『湯崗子温泉絵葉書第二輯』より）



現在の湯崗子温泉（2010年9月著者撮影）

(3) 五龍背

時期	出典	温泉の特徴・見所	施設名
	南満洲鉄道案内 満鉄、1909		(施設名なし)
1910	南満洲鉄道案内 満鉄、1912	・1909年8月7日より安奉線の改築工事に着手、 1911年10月に全線を広軌化 ・日露戦争後に庵谷某が温泉場を経営	(施設名なし)
	満洲旅行案内 満鉄、1914		(施設名なし)
1915	満鮮観光旅程 満鉄大連管理局営業課、 1916		五龍閣
	南満洲鉄道旅行案内 1917、満鉄	・温泉割引乗車券あり ・沙河上流の川岸に温泉が湧出 ・撤兵後、日本人庵谷某が駅の東2丁に温泉場 を経営	五龍閣
	南満洲鉄道旅行案内 大正 8年版 1919、満鉄	・沙河上流の川岸に温泉が湧出 ・日露戦争後、日本人庵谷某が駅の東2丁に温 泉場を経営。建物庭園を整え客室を増築、浴 場を整備、防寒設備を整えた ・のちに八幡某の手にうつり、修繕を加えて温 泉ホテルと称して営業	温泉ホテル
	満洲温泉海水浴案内 [1919、満鉄]	蛤蟆塘河河畔に湧出	温泉旅館五龍 閣
	満鮮観光旅程 満鉄大連管理局営業課、 1919		五龍閣
1920	満鮮観光旅程 満鉄大連管理局営業課、 1920		五龍閣
	鮮満支観光旅程 満鉄鮮満案内所、1922		五龍閣

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

施設特色	部屋等級	宿泊料金	食事朝	食事昼	食事夕
		1円60銭 浴料1日 10銭			
温泉旅館					
・防寒設備あり ・朝鮮・満洲各地からの汽車賃割引あり ・長期滞在者への割引あり		1円50銭 ～5円		宿泊費の 半額	
・朝鮮と満洲各地からの汽車賃割引あり ・長期滞在者への割引あり		2円50銭 ～6円		宿泊料の 半額以内	
・洋館、内部は和風 ・和風離れ2 ・浴室設備完備 ・10日以上滞在者は割引あり ・自炊希望の場合、必要品は実費で用意可能	特等	6円		2円50銭	
	1等	4円50銭		2円50銭	
	2等	3円50銭		1円70銭	
	3等	2円50銭		1円20銭	
	下宿甲 3食付き	3円			
	下宿乙 3食付き	2円			
	自炊席料 上等室席料	20～30銭（入浴10銭） 1～10円			
温泉旅館					
温泉旅館					
○（本書では、◎は特等または〔洋〕式、○は1等または2等）					

	<p>滿鮮の行楽 田山花袋、1924、大阪屋 号書店</p>	<p>春秋2回の大園遊会が開催されていた</p>	<p>(施設名なし)</p>
	<p>鮮満支那旅程と費用概算 1924、[満鉄東京鮮満案 内所]</p>		<p>五龍閣</p>
	<p>南満洲鉄道旅行案内及附録 満鉄、1924</p>	<p>鮮満各地から汽車の割引あり</p>	<p>五龍閣</p>
1925	<p>朝鮮満洲旅行案内：附支 那旅行案内 満鉄鮮満案内所、1925</p>		<p>五龍閣</p>
	<p>満洲旅行案内 満鉄、1925</p>		
	<p>朝鮮満洲旅行案内：附支 那旅行案内 満鉄鮮満案内所、1926</p>		<p>五龍閣</p>
	<p>満鉄沿線案内 満鉄、[1927]</p>		<p>五龍閣</p>
	<p>南満洲鉄道旅行案内 1929、満鉄</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 駅から温泉まで並木道が続く。一帯は水田 ・ 沙河の五龍橋を渡ると小丘を背にして温泉場 の建物群あり ・ ホテルは私営だが、周辺は満鉄経営の公園 ・ 水田中にも湯が沸き、駅員用の浴場あり 	<p>五龍閣</p>
			<p>保養館</p>
			<p>聚楽館</p>
	<p>朝鮮満洲旅行案内 満鉄鮮満案内所、1929</p>		<p>五龍閣</p>
1930	<p>朝鮮満洲旅行案内 鮮満案内所、1930</p>		<p>五龍閣</p>

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

・赤煉瓦の宏壮な建築 ・浴場にロシア式ペチカ ・滞在客には間貸しと割引の相談に応じる		1円50銭 ～5円			
周囲の眺望良し		4～7円			
旅館は設備完備で四季を通じて入浴客が多い					
周囲の眺望良し		4～7円			
		2円～	1円50銭	2円	2円
・短期宿泊向き的高等旅館 ・敷地内9カ所から湯を引く ・男女別共同浴槽各1 ・家族湯2 ・温泉プール ・理髪、ビリヤード、新聞室、売店、写真室 ・食事は定食のみ	特16畳	7円	1円50銭	2円	2円
	16畳	5円			
	10畳	4円			
	8畳	2円～ 2円50銭			
	6畳	1円50銭 ～2円			
・五龍閣の棟続き。長期客用 ・自炊または経済的賄いを選択できる ・7室 ・自炊材料は実費。用器具は各自持参 ・男女浴槽各1 ・共同炊事場 ・寝具は15銭	4畳半 (2名まで)	1円20銭	1円	1円50銭	1円50銭
	6畳	1円50銭			
	3食賄付	3円50銭			
保養館の隣。平屋。日帰り団体客用。児童用プール（10銭）あり	入浴休息	大人50銭 子供25銭	丼50銭、弁当80銭		
周囲の眺望良し		4～7円			
周囲の眺望良し		4～7円			

満蒙遊記 与謝野寛・与謝野晶子、 1930、大阪屋号所店	<ul style="list-style-type: none"> ・ 駅員とホテル従業員以外、日本人は居住して いない ・ 温泉で水田を耕作している ・ 温泉は満鉄の間接経営 ・ 沙河には楊柳が植えられている 	五龍閣	
日本温泉案内：西部編 大日本雄弁会講談社、1930	(リストアップのみ)		
朝鮮満洲旅行案内 鮮満案内所、1931		五龍閣	
満洲視察要覧：附遊覧案 内、昭和6年版 藤原満洲問題研究所、1931	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安東から40分 ・ 蛍が名物 	五龍閣	
		保養館	
		聚楽館	
少年日本地理文庫：関東 州南満洲 橋本賢康、1931、厚生閣 書店		五龍閣	
満洲国旅行案内 大津敏也、1932、新光社	<ul style="list-style-type: none"> ・ 田園中にも湯が沸いており、駅員の温泉がある ・ 満鉄経営の公園でブランコ、滑り台、池あり 	五龍閣	
		保養館	
		聚楽館	
大満洲国読本 渋谷近蔵、1932、育英書院	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「夏は青田に蛙鳴き、蛍流れに飛び、暁ほと とぎすの鳴きわたるを聞く、身の満洲にある を忘れしめるほど日本的」 		

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

・煉瓦造りでツタに覆われた洋館、中は和風					
周囲の眺望よし		4～7円			
短期滞在向き、高等旅館		1円50銭～	1円20銭	1円50銭	1円80銭
・長期滞在・自炊向き ・経済賄い付きも利用可能		60銭、80銭 寝具1日 30銭			
日帰り、団体用休息所		日帰り 1人40銭 (子供20銭)			
・温泉高等旅館 ・男女別の湯各1 ・家族湯2 ・温泉プール、理髪、ビリヤード、写真室	特16畳	7円	1円50銭	2円	2円
	16畳	5円			
	10畳	4円			
	8畳	2円～ 2円50銭			
	6畳	1円50銭 ～2円			
五龍閣の棟続き。長期客用					
保養館の隣。平屋。日帰りと団体客用					
冬の防寒設備完備					

	満洲温泉案内 満鉄鉄道部営業課、1933、 満鉄	<ul style="list-style-type: none"> ・安東から列車で35分、奉天から5時間 ・温泉割引往復乗車券あり ・満鉄直営の温泉場 ・京城、平壤からの客もあり ・近年設備が充実。満洲とは思えない情緒で内地をしのぶ日本人を引きつけている ・敷地内9カ所から湧出 ・1918年に満鉄が経営を引き継いだ。 	五龍閣本館	
			保養館	
			聚楽館	
	朝鮮満洲旅行案内 満鉄、1933、鮮満案内所			
	朝鮮満洲旅行案内 満鉄、1934、鮮満案内所			
	鮮満中国旅行手引 [満鉄]東京支社庶務課、 [1934.3]、[満鉄]東京支社		温泉ホテル	
			保養館	
			聚楽館	
1935	満洲旅行の栞 昭和10年 度版 [1935]		温泉ホテル	
	満洲温泉案内 加藤郁哉、1935、満鉄鉄 道部旅客課	<ul style="list-style-type: none"> ・安東から35分、奉天から5時間 ・田園村落の趣。夏のホタル、秋の初茸狩りなどを楽しめる 	五龍閣本館	
			保養館	
			聚楽館	
	満洲温泉案内 加藤郁哉、1936、満鉄鉄 道部旅客課		(五龍閣、	
			バンガロー	

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

・和室 14 ・内湯あり		1 円 50 銭 ～ 7 円 (休憩料も 同じ)	1円20銭	1円50銭	2 円
・和室 7 ・内湯あり ・自炊設備あり		60 銭～ 80 銭 (休憩料も 同じ)			
	賄付	3 円			
・日帰り客、団体用 ・和室 4 ・内湯あり ・子供半額	(室料とし て入浴料 込み)	40 銭	3 食共通、井 40 銭		
周囲の眺望良し		4～7円 茶代廃止			
周囲の眺望良し		4～7円 茶代廃止			
満鉄直営ホテル		4 円～ 茶代廃止 心付1～2割			
・外観は洋館 ・和室 14 ・大広間 1 ・純日本式離れ 2 種 ・家族風呂 3 ・男女大浴室各 1	宿泊	1 円 50 銭 ～ 7 円 (1 人増で 半額増、3 人からは 割引あり)	1円20銭	1円50銭	2 円
	休憩	上記料金 の1/4～2/3			
・五龍閣の棟続き ・長期向き ・大小客室 7	自炊	60 銭～ 80 銭			
	3 食賄付	3 円 寝具使用 30 銭			
・日帰りおよび団体客用 ・内湯 2 ・広間 4	入浴休憩	40 銭	井 40 銭～		
保養館、聚楽館の詳細については1935年版に同じ)					
・本館前の丘のスロープにあり。山小屋風 ・5～10月に利用可能 ・3種 ・8畳・ポーチ・押入・トイレ付き		3 円 寝具・浴 衣は無料 貸出	食事は本館から運ばれる		

	満鉄沿線案内 昭和11年度版 満鉄、1936、満鉄鉄道部旅客課	「閑雅幽遠」な趣	(施設名なし)
	朝鮮満洲旅行案内 三省堂旅行案内内部、1936	・安東から35分 ・内地の田園村落の趣 ・旅館は満鉄の直営 ・温泉には遊園地あり	五龍閣 保養館 聚楽館
	満洲旅行の栞 昭和12年度版 [1937]		温泉ホテル
	満洲旅行の栞 昭和13年度版 満鉄鉄道総局営業局旅客課、[1938]		温泉ホテル
	満洲旅行の栞 加藤郁哉、1939、満鉄鉄道総局営業局旅客課		五龍閣
	東亜新満洲文庫尋常1・2・3学年用3(地理篇):明るい港黄色い風 石森延男、1939、修文館		
	満支旅行年鑑 昭和14年版 ジャパン・ツーリスト・ビューロー 満洲支部、1939、博文館	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)
1940	満支旅行年鑑 昭和15年 ジャパン・ツーリスト・ビューロー 満洲支部、1940、博文館	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)
	満支旅行年鑑 昭和16年 ジャパン・ツーリスト・ビューロー 満洲支部、1941、博文館	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	(施設名なし)
	満支旅行年鑑 昭和17年 東亜旅行社満洲支部、1942	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	五龍閣 保養館
	満洲旅行の栞 昭和17年度版 [1942]		温泉ホテル

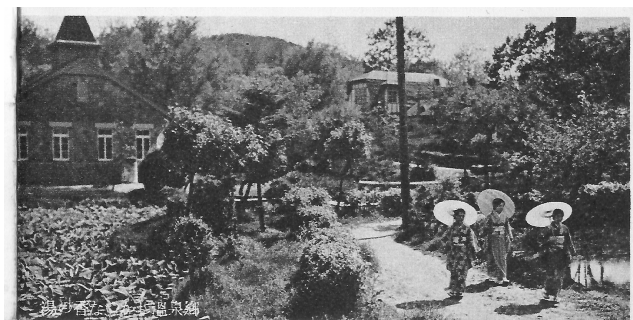
戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

鉄路総局直営			
鉄路総局直営		4円～ 茶代廃止 心付1～2割	
・客室 19 ・収容人員 76		7～12円	
・客室 9 ・収容人員 41		6～7円	

満支旅行案内 昭和 17 年 東亜旅行社満洲支部、1942、 博文館		五龍閣	
保養館			
満支旅行年鑑 昭和 18 年 東亜旅行社満洲支部、1943、 東亜旅行社奉天支社	日本人の間でよく知られ、利用客も多い	五龍閣	
		保養館	



熊岳城温泉ホテル砂風呂（絵葉書）



五龍背温泉（『満洲温泉案内』満鉄、1936年より）

・客室 19 ・収容人員 76		7～[13]円	
・客室 9 ・収容人員 42		6～7円	
・客室 19 ・収容人員 76		7～12円	
・客室 9 ・収容人員 42		6～7円	



同 螢狩の様子

(4) その他の温泉

時期	出典	興城 (奉山線沿線)	温泉寺(興城)	ハロンアル シヤン (興安嶺)	九台 (京図線沿線)
1930	日本温泉案内：西部編 大日本雄弁会講談社、1930				
	索引式全日本旅行辞典：附・ 満洲 旅行研究会、1932				
	[北日本汽船株式会社案内パン フレット] 北日本汽船株式会社、1934				
1935	満洲旅行の葉 昭和 10 年度版 [1935]	温泉ホテル 鉄路総局直営 宿泊 4 円～ 茶代廃止 心付 1～2 割			
	満洲温泉案内 加藤郁哉、1935、満鉄鉄道部 旅客課	○		○	
	満洲温泉案内 加藤郁哉、1936、満鉄鉄道部 旅客課	○		○	
	満洲旅行の葉 昭和 12 年度版 [1937]	温泉ホテル 鉄路総局直営			
	満洲旅行の葉 昭和 13 年度版 満鉄鉄道総局営業局旅客課、 [1938]	温泉ホテル		阿爾山ホテル 鉄路総局直営	九台温泉ホテル

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

朱乙	熱水湯	狗兒湯 (本溪湖)	湯池子 (安奉沿線)	東湯(湯山城)	その他
		○	○	○	龍門（熊岳城付近）、 上湯（安奉沿線）、大 湯溝（安奉沿線）、柳 河（安奉沿線）、安北 湯（松樹駅）、煎子湯 （松樹駅）、思拉堡（廬 家屯駅）、湯池溝（大 石橋駅）
				聖泉寺境内、 「廟湯」として 僧侶が利用、 泉質は五龍背 よりも良い	
鮮仙閣 千歳館 萬翠 小倉旅館 金田温泉					
朱乙温泉					

<p>鮮満支旅の葉 満鉄東京支社、1939</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・駅の東南4km。馬車30銭、乗合い自動車20銭 ・温泉と海水浴で知られる ・湧出量は1時間あたり52石 ・鉄路総局直営ホテルあり(1934年～) 		<ul style="list-style-type: none"> ・興安温泉とも呼ぶ。蒙古語名ハルヒハロンアルシャンは「露温泉」「熱い甘露」の意味 ・海拉爾から1日1便の定期バス、または白阿線を利用 	
<p>満洲旅行の葉 加藤郁哉、1939、満鉄鉄道総局営業局旅客課</p>	<p>興城温泉ホテル 鉄路総局直営 4円～ 茶代廃止 心付1～2割</p>		<p>阿爾山ホテル 鉄路総局直営 4円～ 茶代廃止 心付1～2割</p>	<p>九台温泉ホテル 4円～ 茶代廃止 心付1～2割</p>
<p>満支旅行年鑑 昭和14年版 ジャパン・ツーリスト・ビューロー満洲支部、1939、博文館</p>	<p>70度 近年話題となる 鉄道総局直営 ホテルあり</p>		<p>特異な温泉場 鉄道総局直営 ホテルあり</p>	<p>冷泉を加熱 1937年夏からの施設</p>

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

		満鉄が付近の山野を購入し、温泉郷化する計画あり		○	安北湯（松樹駅）、剪子湯（松樹駅）、思拉堡（廬家屯駅）、龍門（熊岳城付近）、倪家台（鞍山）、湯河沿（遼陽）、湯池溝（河口）、湯池子（鳳城）、廟嶺溝（鶏冠山）、湯池子（安東）、勾湯・湯池溝（岫巖）、白頭火山温泉＜硫黄温泉、温水長温泉、白温泉、天池・三池淵＞、烏雲和爾冬吉火山漿泉（龍鎮）、湯山（興安西省林西）、金英河上流熱水塘（熱河）、毛金鷄山熱水塘（承德）、湯上（承德）、黙泌（熱河）、凌源熱水塘（熱河）、建平熱水塘（熱河）、瓜地（熱河）、熱水溝（熱河）、湯山（奉山線中県）

	満鉄ホテルチェーン 満鉄、[1935～1940頃]	興城温泉ホテル ・内部を改装し和式旅館とした 客室20 宿泊費5円～7			
1940	満支旅行年鑑 昭和15年 ジャパン・ツーリスト・ビューロー満洲支部、1940、博文館	70度 近年話題となる 鉄道総局直営 ホテルあり		特異な温泉場 鉄道総局直営 ホテルあり	冷泉を加熱 1937年夏か らの施設
	満支旅行年鑑 昭和16年 ジャパン・ツーリスト・ビューロー満洲支部、1941、博文館	(同上)	○	(同上)	(同上)
	満支旅行年鑑 昭和17年 東亜旅行社満洲支部、1942	興城温泉ホテル 客室20 収容数66 宿泊費6円	簡易宿泊所 収容数40 宿泊費1円 50銭～2円	阿爾山ホテル 客室9 収容数10 宿泊費4～7円	清風館 客室12 収容数20 宿泊費3円 50銭～8円 翠前荘 客室13 収容数25 宿泊費2～4円
	満洲旅行の栞 昭和17年度版 [1942]	温泉ホテル		阿爾山ホテル	九台温泉ホテル

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

		満鉄が付近の山野を購入し、温泉郷化する計画あり		○	安北湯（松樹駅）、剪子湯（松樹駅）、思拉堡（廬家屯駅）、龍門（熊岳城付近）、倪家台（鞍山）、湯河沿（遼陽）、湯池溝（河口）、湯池子（鳳城）、廟嶺溝（鶏冠山）、湯池子（安東）、勾湯・湯池溝（岫巖）、白頭火山温泉＜硫黄温泉、温水長温泉、白温泉、天池・三池淵＞、烏雲和爾冬吉火山漿泉（龍鎮）、湯山（興安西省林西）、金英河上流熱水塘（熱河）、毛金鶏山熱水塘（承德）、湯上（承德）、黙沁（熱河）、凌源熱水塘（熱河）、建平熱水塘（熱河）、瓜地（熱河）、熱水溝（熱河）、湯山（奉山線中県）
		(同上)		○	上記温泉に千山（七嶺子村）、牛圈子（承德）を加える
		(同上)		○	上記に三〔隊？〕（大栗線花山）、大営（撫松）を加える
朱乙温泉	熱水湯温泉		湯池子温泉		

満支旅行案内 昭和 17 年 東亜旅行社満洲支部、1942、 博文館	興城温泉ホテル 客室 20 収容数 66 宿泊費 6 円	簡易宿泊所 収容数 40 宿泊費 1 円 50 銭～2 円 朝食 50 銭 昼食 60 銭 夕食 80 銭	阿爾山ホテル 客室 9 収容数 10 宿泊費 4～ 7 円	清風館 客室 12 収容数 20 宿泊費 3 円 50 銭～8 円 翠前荘 客室 13 収容数[25] 宿泊費 2～ 4 円
満支旅行年鑑 昭和 18 年 東亜旅行社満洲支部、1943、 東亜旅行社奉天支社	興城温泉ホテル 客室 20 収容数 66 宿泊費 6 円	簡易宿泊所 収容数 40 宿泊費 1 円 50 銭～2 円 朝食 50 銭 昼食 60 銭 夕食 80 銭	阿爾山ホテル 客室 9 収容数 10 宿泊費 4～ 7 円	清風館 客室 12 収容数 20 宿泊費 3 円 50 銭～8 円 翠前荘 客室 13 収容数 25 宿泊費 2～ 4 円

おわりに

1900 年代はじめ頃，国内ではすでに現在に近い形での温泉旅行が成立しつつあった。特に第一次世界大戦後，国民生活の向上にともなって観光が可能な富裕層の裾野が広がると，日常生活を離れて異域に遊ぶ温泉行楽は一大ブームとなったのである²¹⁾。

この温泉ブームに乗って，3つの温泉地には様々な人々が訪れた。1929 年末に日本温泉協会が設立されると，翌 1930 年には日本温泉協会満洲支部がジャパン・ツーリスト・ビューロー（以下，ビューロー）大連支部に設けられ，満鉄，ビューロー，各旅館から 16 名の役員が選任された。この時の正会員は，熊岳城温泉ホテル，湯崗子温泉株式会社，五龍背温泉である。その後，満洲事変によって協会業務は一時滞ったが，1935 年に新たに満洲国政府，鉄路総局関東州庁サイドを加え，役員 33 名で再構成された。その後，三温泉以外の温泉地も会員に加わり，総会

		(1942年に同じ)		○	(1942年に同じ)

のほか、「満洲温泉に関する懇談会」などが開催された²²⁾。やがて、日中戦争の開始とともに、慰問や戦跡観光がさかんになると、満洲の20余りの温泉地が旅行案内に紹介されるようになるのである²³⁾。

筆者の関心は、一般国民の日常的な感覚のなかに存在した満洲（そして「支那」）のイメージを鮮明化することにある。満洲の温泉は、この命題を解析する上で格好の素材を提供してくれる。満洲において日本式の温泉行楽が、風俗業的側面も含め、いかにして進められたか、またその過程で満鉄がどのような構想を持っていたかといったテーマについては、別稿を立ててあらためて論じたい。

註

- 1) 田山花袋『第二軍従征日記』（博文館、1905年）。
- 2) 富田昭次『ホテルと日本近代』（青弓社、2003年）。
- 3) 戦前の日本人の満洲観光については、高媛氏が戦跡観光を中心に分析を行っている。「新天地」への旅行熱（上）「満韓巡航」から「鮮満の旅」

- へ』（『観光文化』150号、日本交通公社、2001年11月）、「『新天地』への旅行熱（下）「観光楽土」に第一歩を」（『観光文化』151号、日本交通公社、2002年1月）、「『楽土』を走る観光バス」（『岩波講座近代日本の文化史6』岩波書店、2002年）、「戦地から観光地へー日露戦争前後の『満州』旅行」（『中国21』29、愛知大学現代中国学会2008年3月）、「戦勝が生み出した観光ー：日露戦争翌年における満洲修学旅行」（*Journal of global media studies*, 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部、2010年9月）など。
- 4) 『満洲視察要覧：附遊覧案内、昭和6年版』（藤原満洲問題研究所、1931年）105頁など。ただし、『満洲温泉案内』（満鉄、1935年）[5頁]では「一昼夜三千石」と記されるなど、記載内容にばらつきがある。
 - 5) 大津敏也『満洲国旅行案内』（新光社、1932年）80頁。
 - 6) 韓国教員大学歴史教育科『韓国歴史地図』（吉田光男監訳、平凡社、2006年）48-49頁。
 - 7) 『南満洲鉄道案内』（満鉄、1912年）70頁など。
 - 8) 『遼陽と鞍山：附千山、湯崗子』（遼鞍毎日新聞社、1925年）191頁。
 - 9) 同上、192頁。
 - 10) 同上、193頁。
 - 11) 木下立安『乾ける国へ：満鮮支那紀行』（鉄道時報局、1932年）、田山花袋『満鮮の行楽』（大阪屋号書店、1924年）、与謝野寛・与謝野晶子『満蒙遊記』（大阪屋号書店、1930年）、遅塚麗水『満鮮趣味の旅』（大阪屋号書店、1930年）など。
 - 12) 橋本賢康『少年日本地理文庫：関東州南満洲』（厚生閣書店、1931年）181頁。
 - 13) 満洲日報社学芸部案・武田一路画（満洲日報社、1935年）。
 - 14) 石森延男『東亜新満洲文庫尋常1・2・3学年用3（地理篇）：明るい港黄色い風』（修文館、1939年）19-20頁。
 - 15) 前掲『満洲国旅行案内』118頁
 - 16) 前掲『東亜新満洲文庫尋常1・2・3学年用3（地理篇）：明るい港黄色い風』26頁。
 - 17) 日韓旅館要録編纂所『吾輩は何処に泊らう』（東京人事興信所、1910年）110頁。
 - 18) 前掲『南満洲鉄道案内』7-8頁。
 - 19) 『満洲温泉案内』（満鉄、1933年）表側。
 - 20) 前掲『満洲温泉案内』（1935年）[9頁]。
 - 21) 関戸明子『近代ツーリズムと温泉』（ナカニシ屋出版、2007年）。

戦前期満洲の三大温泉（瀧下）

- 22) 『東亜旅行社満洲支部十五年誌』（東亜交通公社満洲支部, 1943年）96-100頁。
- 23) 『満支旅行年鑑. 1939年版』（ジャパン・ツーリスト・ビューロー満洲支部, 1938年）など。